

方丈記 安元の大火

① 予、もの^はの^{物事}心^はを知れ^りし^時より、四十^年あまりの春秋^{歲月}を

送^{送つ}れる^た間に、

② 世^{この}の不思議を見ること、ややたびたび^{だんだん}になりぬ^{なつた}。

③ いんじ^{去る}安元三年四月二十八日か^{思う}とよ。

④ 風^が激しく吹^{吹い}きて、静^{静か}かならざ^{なかつ}りし^た夜、戌^{午後八時}の時^頃ばかり、

都の東南より火^が出^{出てき}で来て、西北に至る。

⑤ 果^{しまい}てには朱雀門・大極殿・大学寮・民部省などまで移^{火が}りて、

一夜^{それらが}のうちに塵灰^{なつ}となり^{てしまつ}に^たき。

⑥ 火^火もとは、樋口富小路^{いうことだ}とかや。

⑦ 舞人^{泊めていた}を宿^{飯小屋}せる飯屋^{火が}より出^{出てき}で来^たたり^{そうだ}ける^{いうことだ}となん。

⑧ 吹き迷^{迷う}ふ風^{あちらこちらと}に、と^{火が}かく移^{うち}りゆくほどに、扇^{火が}を広^たげたる^たが^{ように}ごとく

末^{なつ}広^たになりぬ^た。

⑨ 遠^{遠くの}き家^{火事の}は煙^煙にむせび、近^{近い}き^所あたりはひたすら炎^炎を地^地に吹^吹きつけたり^{ていた}。

⑩ 空^{風が}には灰^灰を吹^吹きたてた^たれば、火^火の光^光に映^映じて、あまねく^{空が}紅^{である}なる^{なる}中^中に、^{動四体}

⑪ 風^{の勢い}に堪^{堪えられ}へず、吹^吹き切^切られた^たる炎^炎、飛^飛ぶ^がが^{ように}ごとく^{して、}

接助

一、二町を越えつつ移りゆく。

⑫ その中の人、うつし心あらんや。

⑬ あるいは煙にむせびて倒れ臥し、あるいは炎にまぐれて

たちまちに死ぬ。

⑭ あるいは身一つ、からうじて逃るるも、資財を取り出づる

に及ばず。

⑮ 七珍万宝 ながら灰燼となりなき。

⑯ その費え、いくそばくぞ。⑰ そのたび、公卿の家十六焼けたり。

⑱ ましてそのほか、数へ知るに及ばず。

⑲ すべて都のうち、三分が一に及べりとぞ。

⑳ 男女死ぬる者数十人、馬・牛のたぐひ辺際を知らず。

・人の営み、みなおろかなる中に、さしもあやふき京中の家を

作るとて、宝を費やし、心を悩ますことは、すぐれてあぢきなく

ぞ侍る。